

ケーキの切れない非行少年たちと頑張れない子どもたち

宮口 幸治

立命館大学

少年矯正施設において認知機能に問題のある在院者への矯正教育や治療が課題となっている。特に発達障害や知的障害をもった少年たちは、みる力・きく力が弱く支援・教育内容が理解しにくい、目の前にないものを想像する力が乏しい、といった機能的な問題から、自己洞察や内省の深まりに限界が生じている可能性もある。また罪の意識や共感性などは道德発達の一部であるが、認知機能の障害は、学業不振、衝動性、他者への共感性や罪の意識の乏しさ、自分の行為を予測する力の乏しさ、問題解決力の乏しさなどに影響を及ぼし、反社会的行動に繋がることもある。

例えば、認知行動療法(以下CBT)は思考の歪みを修正する効果的な治療法の一つとなっている。CBTは適切な行為・思考を増やし不適切な行為・思考を減らすことや、対人関係スキルの改善などを目的とする。しかし一方でCBTは、思考の柔軟さ、注意力、ワーキングメモリ、セルフ・モニタリング、抑制力などを含む実行機能といった幅広い認知機能が基礎となっている。このためもし認知機能に障害があれば、これらCBTを使って支援・教育してもなかなか深まらない、積み重ねが出来ないといった状況も生じうる。そこでCBTによる支援や学習支援など様々な教育をより効果的にするため彼らの認知機能の底上げを目的にコグトレ(認知機能強化トレーニング)を開発してきた。

また知的障害までいかないが一定の支援が必要という境界知能も注目されている。境界知能は人口の約14%いるとされる。知的障害や発達障害と診断されると特別支援の対象になるが、境界知能の子たちはほとんど気づかれず支援対象外になることも少なくない。しかし一方で、境界知能はかつてWHOのICD-8で「ボーダーラインの精神遅滞」と分類されていたように本人たちはかなりしんどい思いをしていることが多い。また認知機能の低さに加え、運動技能の不器用さ、実行機能の低さ、学習の遅れ、社会参加の制限などから経済面や就労面など様々な領域での支援の必要性がある。非行少年たちや困っている子どもたちの中にも境界知能が相当な割合で存在すると思われる。

こういったハンディをもった非行少年たちは少年院出院後は社会で真面目に働きたいという気持ちをもっているが、たいてい1か月くらいで仕事を辞めてしまう。認知機能の弱さ、対人スキルの乏しさ、身体的不器用さなどから、言われた仕事がうまくできない・覚えられない、職場の人間関係がうまくいかない、時間が守れないなどのため、やる気はあっても頑張れず就労継続が困難なのに加え、発達障害や知的障害について不慣れな雇用主から叱責を受け、嫌になって辞めてしまうのである。職がないとお金がなく、簡単にお金が手に入る窃盗など再非行につながる。

このような“頑張れない少年たち”、“困っている子どもたち”をどう支援し、そして日々の臨床現場や学校教育現場等においてできる予防策について考えていきたい。